迷宮

桜水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
迷宮

【Ｎコード】
Ｎ２３６４Ｆ

【作者名】
桜水晶

【あらすじ】
ここに迷い込んだ真琴は、今まで知らなかった命の大切さや今まで起こすことのなかった感情を知る。

プロローグ

そこに、美少年が立っている。

大きく深い青色の潤んだ猫のような目に、長くきれいなまつげ。

ちょっと上がった整った眉に、形のいい鼻。

桜色のくちびるに、透き通るような白い肌。

そして、艶やかな、細く繊細な薄茶っぽい色の髪の毛。

細身の身体を包む黒のちょっと大きく半袖の長いパーカーに、

中は灰色の長袖の薄着で着合わせ、下は長い脚を強調するジーンズをはき、

腰にはスティックを入れる小さい鞘のようなものをつけている。

今までにあなたが見たこともないような美少年。

この小説は、この１３歳の少年、「真琴」の視点から描かれます。

孤独

「僕じゃない。こんなことをしたのは、僕じゃない！！」

石の地面に染み付いた赤黒い血の跡。

真琴のスティックの先端についている刃物から滴り落ちる血。

真琴の胸辺りから顔までにかけて浴びた返り血。

足元に倒れているのは、さっきまで一緒に旅をしていた仲間、莢乃だった。

首から勢いよく鮮血が流れ出している。もうゼッタイに助からないだろう。

真琴はへなへなと膝をつき、目を大きく見開いて、がちがちと震えていた。

そして、怖くなって逃げたのだ。

それからだ。

僕と旅をすると不幸になる。僕が不幸にしてしまう。無意識のうちに。

真琴は緒が切れると、意識が飛んだように無くなる。

そして、目の色が無くなり、気がつけば周りはいつも荒れていた。
だから誰もよってこなかった。いつも一人だった。それが当たり前だった。
孤独にはもう慣れていた。
母親さえ寄り付かない彼に、ただ一人やさしく接してくれたのは、
彼の幼馴染である、たった今真琴が殺めてしまった莢乃だった。
もう、そんな人もいない。自分で消したから。
本当の孤独だ。
スティックの先端を拭く。さっきの感覚が手の神経に蘇る。
人の肉を斬ったのは初めてだ。自然と指が動く。痙攣している。
大きく震える手でスティックをつかみ、オプションでつけた魔法を
発動させる。スティックについている黄色い宝石に息を吹きかけると
息と一緒に宝石から魔法が流れ出し、
2，3回フラッシュしてから莢乃を包んで消えた。
証拠は消した。僕じゃないんだ。

ここは迷宮の中の一室。

大きな屋敷のような、石でできた壁と地面に囲まれている。

真琴は知らなかった。人を殺めたことで、真琴はこの屋敷から

もう一生出られなくなったことに。

探し物

もう、この部屋にはいられない。

真琴はこの部屋をあとにし、廊下に出た。

似通った石の扉が、無限に並んでいる。今の部屋の向かって正面の扉を開けた。

なぜか雪が降り積もっている。外だ。冷たい雪を乗せた突風が容赦なく

真琴の顔に吹き付ける。顔が痛い。でもここはまだ探していない。

真琴は、今度はスティックについている紅色の宝石を息で吹いた。

宝石から炎の魂が現れた。真琴はそれを素手で掴み、炎の魂の口（火炎発射口）

を雪に向けた。一瞬で雪は溶け、そこらは水でひたされた。

それから、雪を降らしている源を捕まえて炎の魂で溶かし消した。

視界の障害物が消えたところで、真琴はくまなくこの場所を探した。

魂を探した。でもここにはなんの息吹も感じられなかった。

真琴の探すモノは、無かった。

「外れか。」

より一層、真琴の表情が曇った。さっきまでなら、

莢乃が励まして、まあしょうがないとなっていたのだが、今は一人で

起こりくる感情をすべて押し殺し、何事も無かったかのように

すっきりとした顔をして、また旅を続けたのだった。

さっき登場した「魂」を集めることで、ひょんなことから

迷い込んでしまった、この迷宮から抜けられるはずだったのだ。

莢乃と一緒に抜けられるはずだったのだ・・・。

この異世界と表の世界を結んでいたのは、

地面にぽっかりとあいた1つの穴だった。

最初は岩が置いてあって気がつかなかったが、莢乃と2人でどかした。

そしたら穴が開いていた。13歳の子供たちがぎりぎり通り抜けられる穴だ。

真琴と莢乃の家の近くの茂みにあったのだ。

当然のことながら中が気になってしょうがなかった。あの時はそうだった。

今思えば入らない方がゼッタイに幸せに生きていけた。

疲れしかない。人も殺めてしまった。いいことなど何もない。

いずれここで死ぬことになるんだろうな。

過去

今は、さっきまでいた部屋の隣の部屋に来ている。

ここは地獄のような光景だった。

中央にある血のような赤黒いものでできた沼に、亡者らしき者達が数え切れないほどうごめいている。みんな同じような顔をして、扉の向こうから現れた真琴を、とれた眼球でじっと見つめている。

痛々しい。その一言で十分に表現できるような身なりだった。

焼け爛れ、どろどろと落ちる皮膚の向こうからは、肉と骨と血管が見える。

そして、爛れていないところは腐っているのか。茶色く、腐敗臭がした。

何より、細い。そして全裸だ。莢乃はいなかった。あいつは、

こんなところに落ちるような生き方はしていなかった。僕が保障できる。

どうして僕が、そんな奴の命を絶たせてしまったというと…、

ちょっと前の出来事だ。

真琴と莢乃、二人はさっき、莢乃が死んだ部屋にいる。

「こんなところに長居していたら、香恵さんが悲しむよ。」

と莢乃。

「姉さんのことは口に出すなって言っただろ。もうアイツは表世界にいないんだから、そんなこと言っててもしょうがない。」

真琴が冷たい口調で返す。真琴の姉は暴力団とかかわって殺されたのだ。

その恐ろしい奴らは真琴のいる家にまで来た。途中で通行人が警察を呼んだから

真琴は無事だったが、そのときの記憶は今でも鮮明である。

「でも香恵さん、あたしはあんまり好きじゃなかった。正直いなくなってよかったって

思っているのよ?」

真琴の瞳孔が開く。

「姉さんはうちの奴だ。何の苦労も知らないお前に、そうやって横から

とやかく口出ししてほしくない。それが一番イヤだ。」

「…、真琴は知らないだろうけど、あたしが真琴の家に行ったとき、あたしがトイレを借りに1人になったとき、あの人あたしになんて言ったか知ってるの？

『真琴と仲良くしないで。見ているとイラつくの。もう来ないで。だいたいあなた

素人の癖に一緒に遊んでいるとか何？真琴は忙しいの。どうしてかわかる？

あの子は秀才だからよ。あなたはどうなの。違うんでしょう？だったら真琴の

将来を不安定にさせるようなことはもうしないで。』

だって。ただ友達として遊んでいただけなのに。

どうしてそんなこと言われなきゃなんないの。あたしが。」

学校じゃみんな当たり前のこと、あたしはしたらいけないの？おかしいじゃない。

あの女、常識知らないの？」

「姉さんには障害があったんだ。」

「だから何よ。結局は友達なんて選ばないんだから、みんな。

あんな女、死んで正解だったのよ！！！」

真琴の緒が切れた。気がつくともう莢乃はいなかった。それだけだ。

一時的なけんかで絶命させてしまったのだ。冷めた今は、ちょっとは悪かったという感覚があるから、莢乃をさがした。亡者の中から。でもいるわけが無い。

そんなことに思いをふけていて、真琴は一体の亡者が近づいていたことに気がつかなかった。

亡者

いきなりだった。

羽交い絞めにされて、身動きも取れない。こいつらこんな体型で、よくこんな力が出るなあと思ったくらいである。真琴より遥かに力が強い。

見縊っていた。思ったことは一つだ。このまま行くとゼッタイ、こいつらに道連れにされる。率直に言うと殺される。あの沼に落とされる。

それは避けたかった。

もうここから出られないという現実を知らない真琴は、表世界に帰って

莢乃に誤りたかった。ちゃんと墓を建ててやりたかったのだ。

だから死ぬわけには行かない、と、どこかのアニメのヒーローみたいなことを

考えたが、そんな風に都合よく、力が湧いてきたりはしなかった。

どこからか生首が飛んできて、元々付いている顔をはね飛ばして

くっつき、体力補充っていう展開はなかった。そんな人たちは来な

かった。

今真琴が使えるのは手に握ったままのスティックだけだ。

絞められているので先端の刃物は使えなかった。でも、真琴の息が届けば魔法は使える。

真琴は勢いよく、腹式呼吸で胃がグゥとなるくらい腹筋に力をいれ、できる限りの空気砲をスティックに付いた黄色の宝石に当てた。

すると莢乃の時と同じく、真琴の息風にのって黄色い宝石から魔法が噴出し、醜く腐った体を包み込んで消えた。

周りを見回し、やっと一息ついて座り込んだ。息は荒かった。

さっきから息を止めていた。じゃないとあの亡者の異臭で意識が飛んでしまいそうだった。

服の肩の付け根が亡者の体が触れていたせいで汚れ、茶色くなっていた。

やっぱり異臭がする。臭い臭い臭い・・・・と心の中で連呼する。

でもそんなことをしていては無駄なので、そこだけ刃物で切り離しておいた。

それからこの沼の亡者達を、さっきの一体と同じように黄色い宝石の魔法で

沼ごと全員消し去っておいた。やはりここにも魂は無かった。

見えない世界への扉

真琴の旅は魂を探すこと。

魂を集め、ひとつの結晶を作れば、この迷宮から出られる・・・はずだった。

真琴は地獄の沼があった部屋の隣の部屋に来ていた。

すると今度は何もなかった。部屋一面、壁も地面も石だけで、あとは何もなかった。

目に見えるものは何もなかったが、音だけはあった。

泣き声が聞こえる。すすり泣くような泣き声。細い声の、女の子の。

「誰かいるんですか。」

真琴の呼びかけにも応じない。ただただ泣いている。

「もう一度聞きます。誰かいるんですか？」

やはり何も変化はなかった。すると今度は、

「誰もいませんね。なら、消去の魔法をこの部屋に使っても大丈夫ですね。」

泣き声が止む。そして、細くきれいな声が聞こえた。

「酷いのね。普通女の子が泣いていたら声ぐらい掛けるじゃない？」
「でも、僕には君が見えない。」
「あなた、魔法は使えないの？」
「一応使える。けど、まだ透視の魔法は備わってない。」
「じゃあ駄目ね。」
「どういう意味ですか。あなたの泣いていた理由も含めて。」
「鍵が、ないの。無くしちゃったの。この部屋のどこかで。
だから、ここから出られないの。」
「無くしたって言われても。この部屋には何もありませんよ。」
本当に、何もないのだ。
「あなたの世界の側からはきっと見えないのよ。こっちの世界に来
て。
そして探してちょうだい。こっちの世界からなら、あなたも私が見
えるはず。」
世界？どうやって世界を越える？
「こっちの世界は写しの世界。鏡があれば越えてこられる。

この部屋のどこかに、鏡があるはずよ。見えないけれど。そこから入ってきて。

鏡は魔法をはじくから。」

それだけ言って声は消えた。とりあえず、魔法をはじくならこの空間いっぱいに

魔法を張ればいい。はじかれた場所に鏡がある。そう考えれば簡単だ。

真琴はスティックについている紅色の宝石を息で吹いて炎の魂を出現させ、

魂を壁に固定して、一気に炎を噴出させた。

真琴は、今度は紫色の宝石に息を吹きかけて、自分の周りに

半透明の紫色のシールドを張った。そして炎がいっぱいになるのを待った。

魔法の炎は普通の炎と違い、すぐに消えたりはしない。なので、

この石の部屋は、真琴の炎の魂が3分間くらい炎を噴射し続けていると、

あっという間に炎であふれかえった。

そして、扉から入って右斜めのところに歩いていくとあたる壁が、

炎をはじいて

目立っていた。真琴は炎の魂の出した炎を黄色の宝石の魔法で一気に消すと、

シールドを解いてさっき炎をはじいていた壁の中に走りこんだ。

写しの世界

そこは、さっきの石の壁や地面でできている世界とは違い、すべてが水晶でできていた。家具も置いてある。それも全部水晶だった。

ソファ、テーブル、イス、キッチンまでもがそろっている。さっき真琴が入ってきたらしき

大きな鏡は、テーブルの向こう側に大きく構えられていた。

ということは…、やはり、真琴が土足で今立っていたところはテーブルの上だった。

そして、鏡に向かい合うように設置されたソファに、真琴ぐらいの歳の女の子が

ちょこんと座って、やっぱり泣いていた。

でもどうしてだろう?彼女側の世界からは鍵が必要なのに、僕は無くても

入ってこれた。

「それはね、私がこの世界の住人だから。」

女の子がしゃべった。本当に華奢で細くって、鶯みたいなきれいな声で。

「あなた方の世界と同じよ。ここは私の部屋なの。他の部屋だってそう。

ちょっと変わったところもあるかもしれないけれど、それぞれ好んだ部屋に、

写しの世界側では生きている。住んでいるのよ。」

女の子は大きい碧と蒼の入り混じった目でこちらをじっと見つめている。

「あなたはこの世界の住人じゃないはず。だから最初から写しの世界にいなかった。

私のことが見えなかった。そして、鍵なしに、私が許せば入ってこれた。」

女の子の涙はもう乾いている。首を斜めにしてにこりと微笑んだ。

そして、また

サクランボのようなくちびるを開いて声を出す。

「さあ、鍵をさがしてちょうだい。この部屋のどこかにゼッタイあるわ。

私には見えないから、探しようが無いのよ。鍵を充電するのを忘れてたの。

だからもう光らないから、あとはあなたの知恵と勘と魔法で探し当ててちょうだい。

見つけてくれたら、あなたの旅のお手伝いをしてあげたりできるかもしれないわ。

私がこの部屋から出られれば、ね。」

写しの世界の「鍵」なるものは、充電しないと発光しなくなって、見えなくなってしまうという、とんでもなく面倒くさい代物だった。

でも、鍵を「隠す」なら最適だ。もっとも、隠した場所を覚えていればの話…

どうやって探そう？

「写しの世界の鍵というのは、金属なのですか？」

「いいえ。水晶よ。」

ますますわからない。

「機械じゃ充電できないから魔法でやるの。」

どこかの女神が着てそうなドレスを身にまとった少女が、手から魔法を出して見せた。

「こっちじゃ、そんな棒なくったって体に直接魔力をためられるつくりで

生まれてくる人が多いから、こうして体と魔力さえあれば習得した

魔法なら

簡単に出せるのよ。」

ちょっと感心しながらも、頭は水晶でできた鍵の探し方を考えるのに

いっぱいいっぱいだった。

「鍵を充電すると言っていましたが、それは鍵用の特別な水晶とかですか？

それとも、そこら辺の家具でも充電できるんですか？」

「そこら辺のじゃ充電は難しいかもしれないわ。充電用のものはちょっとそこらのとは

つくりが違うの。充電用のはそのなかに、直にプラズマ魔法をためておけるように、

ちょっと空洞の部屋が多いの。その中に平等にプラズマ魔法のカケラを入れていけば、

まんべんなくきれいに光るでしょ？それで『鍵』の存在が示せる。不便だけどね。」

（どうやって探せと・・・プラズマ魔法があれば部屋全体に魔法を流して

充電が始まったところに鍵があるとわかって簡単なのに・・・）

真琴はまだプラズマ魔法を習得してはいなかった。（ッていうかこのコ、

プラズマ魔法使えるんなら自分で探せばいいじゃん！）と思って口に出したが、

「こんなにか弱い少女に、そんな体力あると思う？」

こうしてはじかれた。とりあえずプラズマ魔法を習得すればいいのだが、

どこでやればいいのか・・・。

「あなたはそのプラズマ魔法、どこで習得しましたか？」

「学校よ。写しの世界にだってソレくらいあるわ。確か、この部屋から

左に9室くらい行った所にあると思うわ。」

「そうですか、ありがとう。」

真琴は写しの世界の中のまま、鍵を探しに部屋を出た。

9室目の部屋に入る。きれいな部屋が、そこにはあった。

とても広い。表世界の学校の体育館ぐらいはある。天井もとても高い。普通の建物なら

ありえないくらいに。この「迷宮」は、建物として成り立っていないのだ。

部屋という1つの「空間」がそれぞれドアの向こうにあり、率直に言えば

「別次元」が部屋としてたくさん集まったところなのだ。
なので、本来は上の階の部屋があるはずの場所にまでその下の階の部屋が
はみ出していても、その上の階の部屋はふつうにちゃんとある。
別の空間だから、重なれる。そう考えれば楽に理解できる。
真琴は部屋を隅々まで観察した。人はいない。
この部屋は水晶でできてはいなかった。
この部屋全体、ピンクがちょっと濁ったような色をしている。
ローズクオーツかなにかだ。床にはすでに、たくさんの傷があった。
きっと
生徒達が走り回って遊んだかなにかしたのだろう。真琴はそう考え、
また歩き出す。
床を見ながら歩いていると、
目を疑うようなものが床に埋まっていた。
人は、いた。
生きている。目を大きく見開いて、下からドンドンと床をたたいて
くる。小さい、

表世界の人間年齢で7、8歳ぐらいの男の子だった。
埋まっているといっても、床の下のひとつの小さな部屋のような空間に、
男の子が1人、入っているのだ。なにか言っているのが聞こえるが、こもっていて聞こえづらい。真琴は床に耳をつけるようにして伏せた。
「僕と代わってください。」
そういっている。どういうことだか、さすがに真琴にも状況が理解できなかった。
「え…？」
するとどこからかハイヒールのような靴の高い踵が、
ローズクオーツの床に当たるような高い音がした。
すると床の下の男の子の表情が強張って動かなくなってしまった。
真琴が振り返るとそこには、ひとつの絡みもないようなきれいな金髪の髪の毛を
後ろで高く束ねてちょっとひねって黒いゴムでとめて、
健康的な白い肌の上の唇には真っ赤な口紅がぬってあり、

度が入った厚い眼鏡に、絹のような素材のスーツのようなものを
着用した、一言で言えばきれいな女性がこちらに歩いてきているところだった。
その女性は口角をにやりと曲げて僕の前まで来て止まった。
「あたしのオブジェよ。どう？」
女性は満足げに男の子を見た。男の子は表情一つかえていない。固まってしまった。
信じられない。ナマの人間が、オブジェだって？どうしてこんな酷いことを？
「オブジェですか？これが？なんの。」
「弱い人間の、オブジェ。この子以外にもいっぱいいるわよ？床をご覧なさい。」
気がつかなかった。この子以外にもたくさんの人間が、床下の、
時間の止まった空間の中に閉じ込められていた。
「あなたもプラズマ魔法を求めてきたようね。
でもね。それを習得するには犠牲がいるの。知らなかったの？それにされたのが
哀れなこの子たち。私が今までに閉じ込めてきた人間の数だけ、

この世にはプラズマ魔法を習得した魔導師達が生きているの。
まあ、犠牲にされた人たちも、した人が死ねばこの世に戻ってこられるんだけど。」
そういう彼女の口調は冷たかった。横目で真琴をみる。
「名は…、マコト？私にはいろんなものが透けて見えるの。
あなたの名前も、あなたの服もね。」
「変態野郎、自分の名を名乗れ。」
「うふ・・酷いのね。あたしの名前はシャウジャ・リーン。プラズマ魔法の
第一習得者。そしてプラズマ魔法専門の大魔導師でもあるわ。」
すると今度は床下の男の子に向き直って口を開く。
「あらあなた、よかったわね。もうすぐであなたの旧友、死ぬわよ。
やっと出られるのね。何年？・・・、２００年ぶりね。
あ、いうの忘れてたけど、習得した特別な魔導師は望んだ時間が生きられる。
うん、この子を閉じ込めたお友達は、欲は少なかったみたいね。

人によっては一生出られない人だっているのよ？
例えば…ウ～ん。あのコね。」
シャウジャは一番端の床を指差した。
「あのコはこの中で一番長い間ここにいるわ。
まあ、居たくているんじゃないんだけど。」
その床の中には、真琴と同い年くらいの男の子が寝ていた。
真琴に劣らないくらいの美少年。
深い碧色で、袖に黒く光る絹のようなものでラインが入っている
きれいな服を着ていた。
シャウジャはそこの床を踏み鳴らし、男の子をおこした。
「くふあ…、ん、んっ？よく寝たァ。何年くらいだろ。５００年？
ねえオバサン。俺、何年くらい寝てた？」
途端に男の子の部屋の中に電気が走る。
「だれがオバサンですって？あたしは電気の使い魔よ。あんまりなめなさんな。

痛い目見るわよ。」

「うええ、わかったよう。で、何年？」

「ざっと１０００年くらいかしら。確かね。」

「えええそんなに寝てたんだァ！もう眠れないよォ。ああ、また暇ばっかだァ。」

男の子はグタッと寝転がる。その茶色くさらっとした髪の毛が

何も無い空間に触れる。疲れたような大きな瞳がゆっくりと閉じられる。

真琴に比べると少々品が無い。まだまだやんちゃ盛りだったのだ。

それにしても、男の子が入る前からいたシャウジャは、一体どんな人なのだろう。

真琴は不意に思った。

つきし仲間

真琴は問うた。

どうしてあの男の子があんなところに？

「あたしの覚えてる限りでは、ある女の人が、自分の魔法習得と引き換えに、

自分の息子を置いていった・・・それが、あのコ。名は、晴樹。ハルキよ。」

もう眠ることができなくなった晴樹は、床に仰向けで伏せながら歌っていた。

とてもきれいな、オカリナのような声で。

「ねえリーン。いつ出してくれるの。いい加減うんざりだよ。もうこの世には、

あの女しか僕の知ってる人はいない。生きてたって意味無いじゃんか。

あの時と同じように、あのときの仲間とふざけたりいたずらしたりつるんだりすることは、もうできないんだから。もう疲れたんだ。

死ねないなんて、この上ない苦痛はない。君はいいねぇ。自由でさっ。」

真琴に向かっても、初めて口を利いた。
なんて悲しいことを言う？もう1人で千年以上生きているのだ。
そう思うのも、仕方の無いことだが。
「リーンさん、あの子をここから出してあげること、できませんか？」
リーンは即答。
「無理よ、決まりだもの。それともあなたがあの子の代わりを連れてきてくれるとでも
言うの？」
「僕は身代わりが使えるんです。」
「駄目よ、からっぽはいけないわ。魂が入ってないと・・・」
「魂入りでね。」
そういうと真琴は、茶色の宝石から影を2体出し、そのままスティックから
茶色の宝石をはずして半分に割り、それぞれ影達の口に放り込んだ。
自分の身代わり（魂なし）の影を出す魔法だったので、

どうしても必要というわけではなかった。

宝石を呑んだ影はみるみるうちに肉体をつけて、1体は晴樹そっくりに、

もう1体は真琴そっくりになった。

「代わりに入ってるんだよ。お前達の役目はそれなんだ。」

シャウジャは、「晴樹」と「シャドー晴樹」をトレードした。

そして「シャドー真琴」をオブジェに加え、真琴はプラズマ魔法を習得した。

真琴のスティックに蒼碧色の宝石がひとつ新たにはめ込まれた。

晴樹はうれしそうだった。

「え、出ていいの!?え、え、なんか知らないけどサンキューッ!!!」

1人だけハイテンションだ。裏世界は千年以上前から表世界の現代語を使ってたらしい。

「ねえ君。」

真琴は晴樹に声をかけた。

「あ、さっきの・・・」

「僕と一緒にこの迷宮を巡ってくれないか？これから先、僕1人じゃ乗り越えては行けない壁にぶつかると思うんだ。何度も。その時に、君の力を借りたい。」

晴樹は一瞬戸惑ったような顔になる。でもすぐに笑みを作り、

「俺でよければ！これから行く当てないし？うん、行かせて下さい！！」

すぐに答えてくれた。真琴は今まで一度も、誰かの手を借りたいなんて

思わなかった。こんな気持ちが湧いたのは初めてだ。どうしても晴樹を

仲間にしたいと思った。自分とは正反対の性格の晴樹といれば、

なにか面白いことがありそうだ、と直感で思ったのだ。

真琴はそのまま晴樹を連れて先ほどの少女の部屋に戻っていった。

ルリレラの鍵

「なあに？もう習得したの？」

あの部屋の少女は大層びっくりしたような声をだして真琴に駆け寄ってきた。

「私が完全習得するには3年かかったのよ！？それをあなたは2時間で！？

すごい秀才なのね！」

なぜかとっても喜ばれた。僕のは身体で覚えるんじゃない。

スティックにつけるだけだからね。

そして少女はやっと晴樹に気がついた。

「あら！新しくもまた美少年登場！？あなたのお仲間？？」

真琴に訊く。

「そう。晴樹っていうんだ。紹介遅れたけど、僕は真琴。」

「クフフっ。短い間にこんなに友達ができて嬉しいわ。

私の名前はルリレラっていうの。よろしくね！…あっ、そうだ。はやく

鍵を。はやくここからでたいわ。あなたもはやく魂がほしいでしょう？」

そうだった。鍵を見つければ魂を探す手伝いをしてくれるというので、

引き受けたのだった。

真琴は、こちらの世界に来るときに、魔法をはじく鏡を見分けるため炎で部屋をいっぱいにしたとき使った紫色の宝石を吹いてあの時と同じ紫色の半透明のシールドを空中に張り、その中に晴樹とルリレラを非難させた。そして、真琴は部屋の中央に立ち、蒼碧色の宝石の魔法を発動させた。宝石の色が、ちょっとだけルリレラの瞳の色に似ていると思った。

真琴が魔法を放ち続けること約5分。もうそれくらいたっていた。だが何も変化がない。晴樹は心配そうな瞳で、ルリレラはちょっと興味深いような、それでいて緊張しているような瞳で、それぞれ真琴を見守っていた。

真琴の体力は限界に達していた。汗をたやすことなく流し続け、

したくちびるをかんでいて、そこからは少し血がにじんでいる。
そして髪も乱れ、瞳孔も開いていた。しかめたような顔をして
ずっと耐えながら身体を震わせている。もうそろそろヤバイぞ。
晴樹は確信し、
「昔、学校で習ったんだ。」
そう言って真琴の方にシールドの中から回復魔法を飛ばして応戦し
ていた。
ルリレラはというと、懐からフルートのようなものを取り出し、
きれいな音色で吹き出した。心が洗われるようですごく心地よかっ
た。
そのまま真琴が持ちこたえていると、部屋の隅が暗くだが光が漏れ
ていた。
「そこか。」
真琴は魔法を止めた。ふらふらしながら隅に落ちている小さな光る
水晶を
拾い上げて、
「あったぞ。」

そういって鍵をルリレラに渡した直後、よろめき、真琴は後ろにそのまま倒れた。

気を緩めた時間

「・・・、・・・と、ま・・こと、真琴。」

誰かが僕の名前を呼んでいる。なぜかすっかり今までの疲れが取れている。

もう、起きられる。

僕はさっと瞼を上にどけて目をいきなりぱっと見開いた。そして一言。

「何？」

目の前にはルリレラが迫っていた。

ルリレラはキャアと叫んで僕の寝ているベットから飛びのけて落ちた。

その振動で、僕の傍らで伏せるように寝ていた晴樹が起きた。

回復魔法はそれなりに体力がいる。それを飛ばすとなると、けっこうな

力を消費するのだ。疲れているに決まっている。でも一晩、

ルリレラと一緒についていてくれたらしい。

「あふァ…、、真琴？もう大丈夫？起きていいの？」

「ああ、もう平気だ。それよかオマエも大丈夫なのか？昨日の魔法で体力…。」

「全然、俺なら大丈夫！ピンピンだから。疲れてなんかないよ。俺は疲れを知らないから。」

ルリレラがベットに這い上がってきた。

「痛い・・びっくりしたよ…も～。いきなり起きないでよ？？なんかほら…

普通の人だったらあんな起き方しないでしょう？なんか前置きとかあるじゃない。

うなったり…、とか？なんかでもほら・・・。」

「ごまかすなよ、ルリレラ～。俺寝ながらも見てたよ。」

「うっそ見てたの！？言わないでよ…きっと怒られるから…。」

「う～ん。そーだね。あれは怒るよネ。」

なにやらかしたんだコイツは・・・

「真琴、怒んないでね。実は～…あなたが寝ている間に～スティックにぃ～…」

しゃべり方がじれったくてイライラする。

「新機能を勝手に追加しようと無理しちゃったのでした。」

しーん

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・・・!!魂を探す手伝いになるような魔法つけておきたくって、でもつけ方わかんないから

いじってたら・・・・スティックが焦げちゃった。」

しーん

「いやごめんなさいごめんなさいごめんなさいねぇぇ!!!!!でもホラ、なおることには

なおるからね!あなたの連れに頼めば…。」

晴樹か。

「えー、余計な仕事増やしやがって。結構疲れるんだぞ、あれは。甘くみんなよ

このヤロー!」

「ごめんなさいって!でも疲れを知らない男なんじゃないの!?」

「ソレとこれとは違う!お前に言ったんじゃないし!真琴に言った

んだし！」

晴樹はちょいキレ気味。ルリレラたじたじ・・・まあその通りだからな。

でも晴樹の「怒る」は、僕のような激しい感情に襲われるようなものではない。

まるでちがう。晴樹は穏やかだ。穏やかというか・・・基本ゆったりのんびりって感じだ。

なので、彼が怒っても意識が飛んだりすることはなく、ちょっとふくれる、

といった感じだ。僕には、とても、無理だ――――

晴樹は整った眉をちょっとだけつり上げ、口の端を曲げるだけだ。

僕も

あれくらい穏やかになりたい・・・真琴は自然にそう思った。

「いいよ。スティックぐらい。コピーデータならとってあるから、空のスティックがあればいつでもチャージできるし。」

「ごめんねぇ、真琴！すいませんですぅぅ！！！」

ルリレラは泣きそうだ。

「あれえ真琴やっさしぃ～。許しちゃうんだ。」

晴樹はちょっと僕に妬いたかのように機嫌を悪くした。

そして、ルリレラが取り付けに失敗した魔法のデータをもらって

二人旅支度をすませたのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2364f/

迷宮

2010年10月21日21時39分発行